NOTEBOOK

あるべき未来に進むために

A 普通横罫 40枚 ノ-200PX

NOVEL

あるべき未来に進むために　9

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15742886

ダイの大冒険, ヒュンケル, アバン, ミストバーン, キルバーン, バーン, 子ヒュン

ヒュンケルとアバン、旅の終わり。
空の技が未完成のヒュンケルに、アバンが、「アバンのしるし」を渡した理由。
章タイトルとタグだけで嫌な予感しかしない章。
流血はないものの、若干残酷な描写があるので、苦手な方はご注意ください。
本編大詰め。あとちょっと。

Table of Contents

あるべき未来に進むために　9

第９章　別離

　アバンたちは、ホルキア大陸中央付近の街道を、地底魔城を目指して進んでいた。
この街道は、旧道であり、ここを進む旅人は少なかった。近年は海沿いの街道が作られたことによって、そちらを選ぶ者が多いからだ。だが、海沿いの街道は地底魔城には通じておらず、かの地を目指すためには必然的に旧道を選択するほかなかった。
　旧道を進み、街から遠ざかると荒野になった。岩肌が目立つ荒れ地が広がっている。足を進めていくと、遠くから低い音が聞こえてきた。
　川の音だ。ここは上流に位置するため、川の流れが速い。低い轟音が響いてきた。
ヒュンケルの前を歩いていたアバンが、不意に足を止めた。
　アバンの背にぶつかりそうになったヒュンケルは、アバンを見上げた。
「先生、どうしましたか？」
　すると、アバンは、少し先を見据えたまま、困ったような声を上げた。
「橋が・・・落ちていますね。」
「え？」
　不穏な言葉に、ヒュンケルはアバンの視線の先を追った。
　すると、旧道の先が断崖になっていて、道が途絶えていた。そして、その崖には、柱が２本、立っていたが、その柱はどこにもつながっていなかった。
　アバンは、崖に近寄り、柱の周りを注意深く見まわした。ヒュンケルも、少し遠くからアバンの行動を見守った。
　アバンは、バケルを呼んだ。
「バケルー。ちょっといいですかー？」
　バケルはひゅーっとアバンの元に飛んでいった。

アバンは、谷底を指さし、何やらバケルに話しかけている。すると、バケルは頷き、谷底に姿を消した。
　しばらくすると、バケルが戻ってきて、アバンに何か話しかけている。
　アバンはそれを聞くと、バケルとともにヒュンケルのところまで引き返してきた。
　アバンは、困ったように眉根を寄せていた。
「ダメですね。橋が落ちています。」
「橋が落ちるって・・・そんなことがあるんですか？」
「吊り橋だと、古くなって縄が切れてしまうことがありますが・・・。バケルにも見てきてもらったのですが、吊り橋の残骸が川に落ちていたそうです。
　ちょっと気になるところもありますが・・・どちらにしてもここは通れません。迂回しましょう。」
　アバンは、岩陰まで移動すると、そこに荷物を下ろして、地図を広げた。
　ヒュンケルたちには休むように勧め、アバンは地図を見ながら考えこんでいた。しばらくして、アバンは、顔を上げると、ヒュンケルとバケルに声をかけた。
「ちょっと行けそうな道があるので、見てきます。すぐに戻ってきますから、あなたたちはここで待っていてください。
　あ、荷物、見ておいてくださいね。」
　そう言うと、アバンは、軽装のまま、その場を離れた。あとに残されたヒュンケルは、地面に座り、バケルは、いつものようにヒュンケルの頭の上を漂っていた。
　手持ち無沙汰になったヒュンケルは、空を見上げた。晴れてはいるが、遠くに厚い、薄暗い色をした雲が見える。
　ひと雨来るかもしれないな。
　そんなことを思いながら、この先の道程を思い描いた。
　地底魔城。
　その言葉を胸に浮かべるだけで、体に緊張が走る。
　故郷であるはずのあの地。
　だが同時に、父が最期を迎えた地でもあり、ヒュンケルの恨みの

源でもあった。
　アバンがそこに行こうとしている、その意味は感じ取っていた。
　アバンは、責任を感じているのだ。いや、彼にとっては、業かもしれない。
　ヒュンケルはアバンの言葉を思い出していた。
—私も、ハドラーも、お互いに、仲間や種族の命を背負って戦っていたんです。
　だから、私がハドラーを倒したその陰に、多くの魔族やモンスターの犠牲があったことを、私は忘れてはいけないんです。
　アバンがハドラーを倒したあの地にもう一度訪れるということは、彼が犠牲にした命と向き合うことなのだ。
　では、自分はどうなのだ。
　ヒュンケルは自問した。
　バルトスの死を、アバンの行いを、そして何よりも、自らの抱く負の感情を見つめなおすことができるのか。その感情は、いぜんより和らいではいるものの、彼の中では未だ、折り合いがつかず、くすぶったままだった。
　彼は、内なる自分と向き合いながら考えを深めようとしていた。
　だから、気付くのが遅れたのだ。
　ヒュンケルが視線を下に戻すと、いつもそこにあったオレンジ色の影が見えなくなっていた。
「・・・あれ？バケル？」
　ヒュンケルはあたりを見回した。
　バケルの姿がない。
　ヒュンケルは、慌てて立ち上がると、バケルを大声で呼び、その近くを探し回った。
「おーい！バケル—！！」
　だが、返事はない。
　ヒュンケルが焦り始めたとき、彼の視界の隅をオレンジ色の影がかすめた。
　遠くの岩肌の向こうに、バケルの背中が消えようとしていた。
　ヒュンケルは急いで追いかけた。
「おい、バケル！！どこに行くんだよ！」

だが、いつもならすぐに振り返るはずのバケルは、背を向けたまま、すうっと岩肌の向こうに飛んでいこうとしていた。ヒュンケルの声が聞こえないのか、振り返りもしなかった。
　ヒュンケルは、嫌な汗が背中を伝うのを感じた。だが、バケルを放ってはおけず、その小さな背中を追いかけて走った。

　バケルが飛んでいった先は、岩山に囲まれた空地のような空間だった。
　ヒュンケルは、走り続け、ようやくバケルに追い付くと、大声でその名を呼んだ。
「バケル！」
　だがやはり振り返らない。
　ヒュンケルは、急いでバケルに飛びついた。二人でもんどりうって、地面に倒れた。
　ヒュンケルは、腕の中に捕まえたバケルに呼びかけた。
「おい、バケル！」
　だが、バケルは、焦点の合わない目をしたままぼんやりとしていた。
　ヒュンケルは、どこか寒い気配を感じ、慌ててバケルの頬を叩いた。
「バケル！俺がわからないのか！？」
　ヒュンケルが頬を叩き、強く呼びかけると、バケルははっと表情を変えた。夢から覚めたような顔をした。
「・・・ヒュン？」
　その声に、ヒュンケルはほっと息を吐いた。
「なんだよ・・・。どうしたんだよ、大丈夫か？」
　すると、突然、背後から声がした。
「お前が、バルトスの息子か。」
　ヒュンケルは、驚愕して振り返った。何も気配はなかったはずだ。武術を学んだ彼が、敵の気配を見逃すはずがない。
「誰だ！！」
　ヒュンケルが振り返ったその先には、確かに何もなかった。少し遠くに荒れた岩の塊が見える、それだけの無機質な視界だった。

そのはずだった。
　突然、虚空が揺らめき、空間がゆがんだような錯覚に襲われた。
　強い悪意、あるいは嘆き、不安、悲しみ。
　そうした暗い感情を掻き立てる気配が、染み出るように、あたりを支配した。
　昼間なのに、突如、夜に転じたような感覚がした。
　あたりに染み出した黒い気配が次第に凝り固まり、形を作る。
　羽の生えた、大きな黒い影が、ヒュンケルに覆いかぶさるように現れた。漆黒の闇の中、金の双眸が、彼を射抜いた。
　ヒュンケルは、剣を抜いて構えた。バケルをかばって、1歩前に出、己を鼓舞するように声を上げた。
「何者だ！！」
　だが、影は、地を這うような低い声を響かせただけだった。
「名乗る必要などあるまい。バルトスの息子よ。」
　また、父の名で、ヒュンケルを呼んだ。ヒュンケルは、一層警戒心を露わにした。
「・・・何故、その名を知っている。俺に何の用だ！！」
「急くな。お前を見出したのは私ではない。恐れ多くも、我が主がお前をご所望だ。」
「・・・何だと？」
　ヒュンケルは、眉をひそめた。
　ヒュンケルに切っ先を向けられているというのに、影のモンスターは気にする様子もなかった。彼は、横に向き直り、何もない空間に向かって、恭しく腕を折り、頭を下げた。
　すると、それまで何もなかったはずなのに、その場に影が現れた。
　白い影だった。
　だが、その白さにもかかわらず、先に現れた影のモンスター、シャドーとは比べ物にならない途方もない闇を、ヒュンケルはその白い影から感じた。
　シャドーは、頭を下げたまま、主に報告をした。
「ミストバーン様。
　連れてまいりました。」

風が吹いた。
　何かがはためいた。
　シャドーが頭を下げた先には、白いローブの男が、虚空に浮かんでいた。
　その瞬間、ヒュンケルの全身が総毛だった。これまで感じたこともない、絶望に近い恐怖が彼を襲った。
　とっさに、彼は叫んだ。
「バケル！逃げろ！！」
　バケルは、その声に身をすくませた。
　だが、バケルが動くよりも早く、黒い腕が何本もバケルに襲い掛かった。猛スピードでバケルに伸びた黒い腕が、バケルを貫こうとする。
　バケルの身が、黒い槍に貫かれた。
　そのはずだった。
「・・・ほう。」
　シャドーは感嘆の声を上げた。
　シャドーが伸ばした黒い腕は、瞬く間にヒュンケルの剣に断ち切られていた。
　ヒュンケルは、剣を振り払った姿勢のまま、シャドーを見据えた。
—・・・何だこいつらは。
　得体のしれない相手。だが敵だということははっきりとわかる。
　ヒュンケルは怒鳴った。
「バケルに何をする！！」
　だが、シャドーは、悠然と答えた。
「ゴーストになど用はない。アンデッドモンスターは、暗黒闘気の影響を受けやすい。だからお前を呼び出すために使っただけのこと。もはや用済みだ。
　用があるのは、お前だ。
　バルトスの息子よ。」
　シャドーの黒い指先が、ヒュンケルをまっすぐに指す。
「・・・暗黒闘気？」
　ヒュンケルはつぶやいた。

聞いたことのないものだった。
だが、この場を満たす、恐怖、不安、嘆き、悪意・・・様々な負の感情が渦巻くこの空気が、暗黒闘気なのだろう。
この気配は、どこかで感じたことがあるような気もした。
ヒュンケルは、直感的に理解し、本能的に恐怖した。
圧倒的な力に押しつぶされそうになる。
ヒュンケルの頬を、冷や汗が伝った。
—・・・敵わない。勝負にならない。
肌で感じる相手からの圧力に、ヒュンケルは、これまでに感じたことのない絶望的な恐怖を感じた。
逃げるしかない。
だが、それさえもできるかどうか。
ヒュンケルの背後では、バケルがヒュンケルの服をつかんでいた。いつも飄々としていて、人を食ったようなバケルの目が、泣き出しそうに歪んでいた。その小さな手が震えていた。
ヒュンケルは、小声で呼びかけた。
「・・・逃げろ。先生を呼んでくれ。俺たちじゃあどうにもならない。」
「ヒュン・・・。」
「俺が隙を作る。いいな。」
涙目で、バケルはうなずいた。
黒い影のモンスターと白いローブの男。白いローブの男が主であることは明らかだ。
ならば。
ヒュンケルは、白いローブの男に狙いを定めた。
「俺に用があるというのなら、受けてみろっ！！」
ヒュンケルは、地面を蹴って飛び掛かった。白いローブの男に向かって、大きく剣を振りかぶった。
はずだった。
「・・・なっ！」
ヒュンケルは、虚空で動きを止めた。
彼の意志ではなかった。
まるで、見えない蜘蛛の巣にとらわれたかのように身動きが取れ

なくなっていた。
「なんだ・・・これ・・・。」
　味わったことのない感覚にヒュンケルは焦り、恐怖を感じた。
　ヒュンケルは、振り払おうと、必死にもがいた。しかし、全身にまとわりついた糸が、一層、彼の肉体に食い込むかのような、ひどい苦痛を感じた。
　見ると、白いローブの男が、ヒュンケルにその左手をかざしていた。
　そこから、何やら黒い気配が漂ってくる。
　白いローブの男が、何らかの技でヒュンケルを拘束しているのだと、彼は理解した。
「くそっ・・・放せ・・・！！」
　だが、逃れようとするヒュンケルに、白いローブの男は、一層、その圧を強くした。ヒュンケルは、見えない糸で、全身を締め上げられる苦痛を感じた。
「・・・うああっ・・・！」
　ヒュンケルのうめき声に、その場を離れようとしていたバケルが振り返った。
「ヒュンッ！」
　ヒュンケルの元に飛ぼうとする。
　影のモンスターの目と、白いローブの男の視線が、同時にバケルに注がれるのをヒュンケルは、見た。
　ヒュンケルは悲鳴を上げた。
「ば、馬鹿っ！バケル！来るなっ！！」
　だが遅かった。
　白いローブの男から伸びた、無数の黒い手が、瞬く間にバケルにまとわりついた。バケルのオレンジ色の身体が、黒い手に覆われ、見えなくなる。
「バケルッ！！」
　ヒュンケルは叫んだ。
　だが、それが最後だった。
　バケルにまとわりついていた無数の黒い手が、ぐっと縮小した。
　次の瞬間。

まるで、風船が弾けたかのように、無数の粒が四散した。
　それは、陽光を受けて、きらめき、あたりに飛び散りながら、地面へと落ちて行った。
　オレンジ色の光だった。
「・・・バケル・・・？」
　バケルのかぶっていた紫のとんがり帽子が、ばさりと地面に落ちた。
　そしてその上に、オレンジ色の涙のように、無数の粒子が降り注いでいた。
　黒い手がほどけた後には、何も残ってはいなかった。
「お手を煩わせ致しました。」
影のモンスターの無機質な声が響いた。
　ヒュンケルは、震える声でつぶやいた。
「・・・嘘だろ・・・バケル・・・どこかに隠れてるだけだろ・・・？だって、お前、オバケじゃないかっ！！」
　だが、ヒュンケルの声に応える者はなかった。
　代わって、聞き覚えのない声が響いた。地の底から聞こえてくるかのような、低く、禍々しい声だった。
　どこから聞こえてくるのかも、誰の声かも分からなかった。だが、それは、まぎれもなく、ヒュンケルに向けられていた。
「お前の父も、こうなったのではなかったか。」
「・・・なんだと。」
「お前の父も、何も遺さずに消えたのではなかったか。このゴーストのように。」
　白いローブの男がまっすぐに、ヒュンケルを見据えていた。彼を拘束する黒い力は緩められてはいなかった。
　ローブの奥に、金の双眸があった。その光が、ヒュンケルをとらえて離さなかった。
　それは、金であるにもかかわらず、影のモンスターのものより、強く、暗い、底知れぬ色を投げかけていた。
　闇の底から声が響く。
「お前の父は殺されたのだろう。勇者に。」
「・・・やめろ。」

「こうやって、消えたのだろう。お前の前で。」
「やめろっ！！」
　ヒュンケルの脳裏に、落城した地底魔城がよみがえる。
　静まり返った城。
　ヒュンケルが走り抜けた回廊の端々には、横たわるモンスターたち。すでにこと切れ、動かない。
　そして、その先に見えた、崩れ落ちた父の体。
　ヒュンケルは手を伸ばしたが、その手の中で、父の体は灰となって崩れ落ちた。
　何も残らなかった。
　２年前の恐怖、絶望・・・そして、憎しみ。
　崩れた父の前に立つ、若い男の姿が脳裏に浮かんだ。
　薄れてきたあの日の激情が、まざまざと蘇る。
「人間どもは、こうやって、魔族やモンスターの屍の上に今の平和を築いた。
　思い出せ。
　お前の父は、何の犠牲になったのだ？」
　その言葉が、呪いのようにヒュンケルの身に付きまとう。
　嘲笑うような声色だった。
「お前に素質があるか、確かめてやろう。」
　どこからともなく聞こえる声が響いた。
　無数の黒い手が、ヒュンケルに迫る。
　その手が、ヒュンケルの肌にまとわりついた。それは、それ自身が意志を持った生き物のように、彼の体の上に這い上がってこようとしていた。
　白いローブの男の意図がつかめず、得体のしれない恐怖がヒュンケルを包んだ。
「・・・何をする気だ。」
　だが、返事はなかった。
　無数の黒い手は、ヒュンケルにまとわりつき、上へと進んだ。
　そして、彼の口元へと伸びていった。
「ぐっ・・・！」
　彼の頬を、黒い手の指先が這う。

動けないヒュンケルの口腔に、黒い手が無理やり入り込もうとする。
もがこうとも、腕さえも動かせない。
指先も見えない糸で締め上げられ、ヒュンケルは、右手に握っていた剣を落とした。からん、と金属が落ちる音が響いた。
―・・・やめろ・・・！
ヒュンケルは、何かに支配されようとする恐怖に襲われた。
―やめてくれっ・・・！！
荒野に少年の悲鳴が響いた。

アバンが壊れた橋の袂まで戻ると、そこにいるはずの姿がなかった。
ヒュンケルも、バケルもいない。
ただ、彼らの荷物だけが、整然とその場に残されていた。
アバンは、あたりを見回したが、二人の気配もない。
アバンは、嫌な予感に襲われた。
急いでその場を離れ、アバンは、二人を探しに走った。

その光景を見たとき、アバンは肝を冷やして、叫ぶようにその名を呼んだ。
「ヒュンケル！！」
アバンの視界の先で、銀髪の少年が、地面に倒れ伏していた。
アバンは、急いで駆け寄った。
ヒュンケルは、意識を失っていた。
アバンが抱き起すと、ヒュンケルは、小さなうめき声をあげた。
「ヒュンケル！」
アバンが呼びかけると、ヒュンケルは、ゆっくりと目を開けた。アバンは、ほっと息を吐いた。
ヒュンケルは、小さな声で、アバンに呼びかけた。
「・・・先生・・・？」
しかし、すぐに表情を変えると、アバンの手を振り払い、後ずさった。
「触るなっ！！」

アバンから離れて、彼を見据えるヒュンケルの目に、アバンは、不可解なものを見た。
「・・・ヒュンケル・・・？」
それは、燃えるような憎しみだった。
２年前、地底魔城の底で、初めて彼を見つけたときと同じ眼差しが、そこにはあった。
アバンは、戸惑った目で、ヒュンケルを見た。
ヒュンケルは、自分を見つめるアバンの眼差しを受けると、自分の行動に困惑したかのように、視線を逸らし、右手を額に当てた。
「・・・先生・・・俺・・・。」
アバンは動揺した。
ヒュンケルが、いつもと違う。何かあったのは間違いないが、予想がつかない。
アバンは、ヒュンケルを落ち着かせるように、ゆっくりと、声をかけた。
「ヒュンケル、何があったんですか？バケルはどうしました？」
「・・・バケル・・・？」
ヒュンケルは、一層戸惑ったようにつぶやいた。
視線をアバンから外したまま、両手で頭を抱えた。
「バケルは・・・あいつに・・・。」
ヒュンケルの中で、あの闇の声が響いた。
—お前の父は殺されたのだろう。勇者に。
—こうやって、消えたのだろう。お前の前で。
—思い出せ。
—お前の父は、何の犠牲になったのだ？
ヒュンケルは、呻くようにつぶやいた。
「・・・殺された・・・。父さんみたいに・・・。」
「えっ！？」
「・・・なんで、なんであいつが・・・。
・・・父さんだって・・・。
それもみんな・・・あんたのせいなのかっ・・・！」
徐々に、ヒュンケルが錯乱していくのを、アバンは感じた。アバンは、必死で、ヒュンケルに呼びかけた。

「ヒュンケル！しっかりしてください！」
「来るな・・・。俺に、かまうなっ！」
　ヒュンケルが後ずさる。
　その彼の足に、彼が落とした抜き身の剣が触れた。
　ヒュンケルとアバンは、同時に、地面に落ちた剣を見た。
　ヒュンケルは、その剣に手を伸ばした。
　だが、アバンの方が早かった。
「ラリホーマ！」
　アバンは、迷うことなくヒュンケルに催眠呪文をかけた。強力な催眠呪文の直撃を受け、ヒュンケルはよろめいた。必死で耐えようと顔をゆがませたが、抗えるはずがなかった。
　ヒュンケルは、うめき声をあげ、そのまま意識を失った。その小さな体がゆっくりと前に倒れ掛かる。
　アバンは、ヒュンケルに駆け寄った。
　そして、意識を失った彼の体を抱きとめた。
「ヒュンケル・・・。」
　アバンが抱き留めたヒュンケルの手足には、無数の細い糸で締め上げたかのような跡が残されていた。
　アバンが、あたりを見回すと、紫紺のとんがり帽子が、空を見上げて落ちていた。
　バケルのかぶっていたものだった。

　アバンは、焚火の側にヒュンケルを寝かしていた。幸い、催眠呪文がよく効いていて、起きる気配はない。
　一体、何があったのか。
　アバンは、とんがり帽子を手にしたまま、思索に暮れていた。
　詳細はわからないが、敵意のある者に襲われたことは間違いない。
　そして、その敵は、ヒュンケルに悪影響を与えたのだろう。そうでなければ、今の彼が、あの燃えるような憎しみの眼差しを向けてきたことの説明がつかない。
　相手は何者なのか。
　ヒュンケル個人が狙われたのだろうか。

アバンは、考えた。
アバンは、ヒュンケル個人が魔族に狙われることはあまり考えてこなかった。いくら地底魔城にいたとはいえ、彼自身は、一介の人間の子どもにすぎない。実際に、この 2 年間、不審なことは何もなかった。
だが、ヒュンケルの持つ肩書を、アバンはあまり考慮に入れていなかった。
ヒュンケルは、魔王軍最強の戦士、地獄の騎士バルトスの息子なのだ。
魔族やモンスターの中に、ヒュンケルの立場を知っている者がいたとしてもおかしくはない。
魔王軍が崩壊した今、その肩書が利用されるとは思っていなかったが、そうではなかった、ということなのかもしれない。
それにバケル。
あの子はどうなったのか。
アバンは、手の中のとんがり帽子に視線を落とした。
ヒュンケルから辛うじて聞き取れた言葉からすれば、バケルはもうどこにもいないのかもしれない。
ヒュンケルは「殺された」という言葉を使った。
殺された。
父さんみたいに。
ヒュンケルはそう言った。
彼にとっては、容易に口にできる言葉ではないはずだ。
アバンは、信じたくはなかったが、ヒュンケルの言葉を軽視することもできなかった。
―バケル・・・。
アバンは、手の中の帽子に目を落とし、オレンジ色の飄々とした笑顔を思い浮かべた。だが、その陽気な姿に反し、バケルとの思い出は、アバンの心に押しつぶしそうな悲痛を訴えかけた。
アバンは、今日 1 日の出来事を思い返していた。
そもそも、これは、橋が落ちていたことから端を発している。
吊り橋を支えていた縄は、ちぎれるように切れていた。鋭利なもので切断されたのではなかったから、人為的なものだとは思わな

かった。だが、縄がさほど古いものに見えなかったので、老朽化にしては早いなとアバンは感じていた。
　その違和感を、もっと重視するべきだったのだ。
　橋が落ちていたため、アバンはほかの道を探るべく、ヒュンケルたちから離れた。そして、アバンがヒュンケルたちから離れていたその間に、何かが起こり、バケルは姿を消し、ヒュンケルに異変が生じた。
　そう考えれば、答えは一つしかなかった。
　狙われたのは、ヒュンケル。
　そして、その目的のために、アバンは、ヒュンケルたちから引き離されたのだ。
　アバンは、きつく唇を噛んだ。
　己の見通しの甘さを悔やんだ。
　いま、アバンは、周囲にトヘロスをかけ、モンスターが現れないようにしている。
　それだけでは不十分と感じ、アバンは、さらに、自分たちの周囲に破邪呪文をかけ、五芒星で周囲を覆った。
　とりあえず、今晩は、これでしのげるはずだ。
　だが、いつまでも殻に閉じこもっているわけにもいかない。
　ヒュンケルを落ち着かせ、バケルを探す。
　アバンは、そう決めていた。
　たとえ、その結果、バケルの消滅を認めざるを得なかったとしても、今のこの状況では納得できるはずがない。
　まずは、何としてもヒュンケルを守ろう。
　アバンは、決意した。
　アバンは、小さな木箱を取り出した。それは、辞書くらいの大きさで、表面には、五芒星が描かれていた。
　アバンは、木箱を開けた。
　その中には、毛足の長い深紅の天鵞絨が敷かれ、そこには、蓋と同じ位置に、５つのへこみがあった。そのうちの４つに、同じ、涙型の輝石が収められていた。
　アバンは、その１つを手に取った。
　輝石は、金の鎖の先につけられており、ペンダントになってい

た。水晶のような透明の石が、焚火の光を受けて輝いた。
―少し早いですが、これを渡した方がいいかもしれませんね。
　顔を上げると、焚火の向こうに、横たわる少年の姿がある。ヒュンケルの目元は、初めて会った時と同じように、涙の跡があった。
　アバンは、輝石を握り、祈った。
―この子を、ヒュンケルを守れますように・・・。

　ヒュンケルは、朝から体が重かった。
　ひどく嫌な夢を見たような気がするが、思い出せない。何か、悪いものを食べたかのように、胸の奥、あるいは腹の中がむかむかする。不快な気分が続いていた。
　だが、いつも冗談めかした顔をしているアバンが、この日は、ひどく真剣な顔をしていた。その上で、ヒュンケルに話がある、と切り出したのだから、ヒュンケルとしても、真面目に話を聞くしかなかった。
　重い体を引きずりながら、ヒュンケルは、無理に平気そうな顔をして、アバンの前に立っていた。
　アバンは、ヒュンケルをまっすぐに見つめていた。
「ヒュンケル。昨日、あなたは何者かに襲われたのではありませんか？」
　アバンの言葉に、ヒュンケルは身を震わせた。だが、昨日の出来事は、頭の中に靄がかかったようにうまく思い出せない。
「・・・わかりません。覚えていません。」
　ヒュンケルは下を向いて答えた。
　アバンは、さらに、ヒュンケルに問うた。
「バケルの身にも何かがあった。」
　ヒュンケルは何も答えなかった。
　アバンは、何も言葉を発さないヒュンケルに向かい、彼を追い詰めないように、優しく、言葉をかけた。
「思い出せなければ、無理に考えなくてもいいですよ、ヒュンケル。」
　だが、アバンは、その声に強い決意を乗せると、言葉をつづけた。

「でも、私は、あの子に何があったのか確かめたい。あの子を、探すつもりです。」
　ヒュンケルは唇を噛んだ。アバンに、何か言わなければいけないことがあるのに、言葉が出ない。
　アバンは、普段の彼とは異なり、真剣な口調で言葉を続けた。
「ただ、おそらく、この先、同様のことが起こります。」
　アバンの声がやけに遠くに聞こえる。水の奥から響くような、ガラス戸の向こうから聞こえるような、どこか遠い響きに聞こえた。
　しかし、そのくせ、周囲を渡る風の音が、近くを流れる川の轟音が、いやに、ヒュンケルの耳についていた。
　アバンは、ヒュンケルに語り掛けた。
「あなたも、私も、自分の身は自分で守らないといけない。だから、私はあなたを一人前の戦士として扱おうと思います。
　あなたはもう十分に、一人前の戦士としての技量を備えていますからね。」
　そして、彼は、ヒュンケルの前に、右手を差し出した。
「その証として、これを渡します。」
　反射的に、ヒュンケルも手を出した。
　ヒュンケルの両手の中に、アバンは、小さな輝きを託した。
　ヒュンケルは、自分の手の中に視線を落とした。そこには、まるで何の穢れも知らないかのような無色の輝きがあった。
　涙型の輝石がその先につけられた、金の鎖だった。
　ヒュンケルは尋ねた。
「・・・これは？」
　アバンは答えた。
「卒業のしるし・・・みたいなものですよ。あなたを一人前の戦士として扱う証です。」
　後に、「アバンのしるし」と呼ばれるようになる卒業の証を付けたペンダント。その１つ目がここにあった。
　魔を払い、聖を高める力を秘めた石だ。
　アバンは、ヒュンケルに諭した。
「あなたの剣には、もう十分な強さがある。通常のモンスターには負けないですし、大人相手にも渡り合うことができる。十分な強さ

です。
　でもね、それは、あくまでも剣の技量の話です。
　剣にはもう一つ、重要な要素があります。」
「重要な要素？」
「心の強さですよ。」
　アバンは、まっすぐにヒュンケルを見つめたまま語り掛けた。
ヒュンケルは、アバンから視線を逸らし、うつむいたままだった。
「相手の技量を図る、洞察力。
　的確な攻撃を繰り出す、冷静さ。判断力。
　相手に向かっていこうとする、気迫。
　どんな不利な状況でも折れない、闘志。
　そして、心に掲げる、戦う目的。」
　その一つ、一つの言葉が、幼い少年に届くように、アバンはゆっくりと語った。
「剣を握るときは、常に極限状態です。命のやり取りをするのですからね。
　心が荒ぶるのも当たり前です。
　ですが、その己の心をコントロールし、振り回されないことがとても大事になってきます。」
　そして、アバンは、今のヒュンケルに最も伝えるべきことを語り始めた。
「殺気立ち、荒ぶる心のまま剣を握っては、かえって自分の身を危険にさらしかねません。」
　その言葉に、ヒュンケルは、ぴくりと身を震わせた。
　彼の反応に気付いたアバンは、ヒュンケルにさらに語り掛けた。
「ヒュンケル、あなたはまだ若い。
　もっと、自分の心をコントロールし、荒ぶる心を抑え、冷静に相手に対峙することが、これからは必要になってきます。
　そうでなければ、空の技は使えるようにならないですし、闘気技も危険です。
　それだけではありません。
　悪意のある相手は、こちらの心が殺気立っていると、そこに付け込んできようとします。

ですから、自分の心のコントロールが必要になってくるのですよ。」
　アバンの言葉が、ヒュンケルの身の内に、一つ一つ響いてきた。
　荒ぶる心。
　殺気。
　それは何のためなのか。
　そのとき、不意に、耳の奥で声が聞こえた。
　それは、昨日聞いた、地の底から響く声だった。
—その殺気は、何のためだ。
　声は問うた。
—お前は何故、剣を習ったのだ、その男から。
—遊びの剣だと、それでは誰も殺せないと言われ、憤慨したのは何のためだったのか。
　その声とともに、ヒュンケル自身の腹の奥から、どす黒い感情が沸き起こってきた。
　久しく感じていなかった、底知れぬ思い。
　いや、今まで彼が身の内に抱えていたものよりも、ずっと深い、地の底に引きづりこまれるような暗い感情だった。
　昨日と同じ言葉が響く。
—お前の父は殺されたのだろう。勇者に。
—こうやって、消えたのだろう。お前の前で。
—思い出せ。
—お前の父は、何の犠牲になったのだ？
　闇があたりを覆い始めていた。ヒュンケルの目には、明るい太陽も、青い空も映ってはいなかった。
　２年前の、地底魔城の光景が、まるで今目の前にあるかのように、鮮やかに脳裏に蘇る。
　自分が今いるところがどこだか、ヒュンケルはわからなくなっていた。
　闇の底から声が聞こえる。
—お前が目指していたものは何だったか。
—お前の戦う目的は何だったのか。
　その声がより鮮明となる。

―お前が殺したかった相手は誰だったか。
―目の前のその男を殺すために、お前は腕を磨いてきたのではなかったのか・・・！
　何が現実で、何が幻なのか。
　目の前のアバンの姿が、夢の中のように、儚く感じられた。
　アバンの声が遠く聞こえる。
「その意味では、あなたはまだまだ完全な戦士とは言えません。あなたの剣には、時折、殺気、というか・・・そういった気配が感じられます。」
　アバンの言葉が耳に入らない。ただ、「殺気」という言葉だけが、いやに生々しくヒュンケルの耳に残った。
　ヒュンケルは、うつむいたまま、ぽつりとつぶやいた。
「・・・先生。先生は、俺の剣に、殺気を感じますか？」
「・・・そう、感じたときもありました。」
「何故だか、気付いていましたか・・・？」
　アバンは答えなかった。
　その沈黙は、より一層ヒュンケルの心を騒がせた。
　カール。
　テラン。
　ベンガーナ。
　ロモス。
　パプニカ。
　そして、ネイル村。
　この２年間、アバンと廻った世界中の村や街での風景が、ヒュンケルの中を過ぎ去ってゆく。それらの光景は、重なり合い、心の中に落ちてゆく。そして、その思い出たちは、ガラスが割れるように、甲高い音を立てて砕け散った。
　ヒュンケルは、口の端を歪めた。
　それは、確かに、笑みだった。
―俺は、なんと愚かだったのか。
　どれほど時間をかけようとも、この男に父を殺された恨みが消えるはずはないのに。
　何故、この男とともに、あの城に戻ろうと思ったのか。

この地上で生きようと・・・思ってしまったのか・・・。
　俺の生きる場所は、この地上のどこにもないのに・・・！
　一瞬だけ、ヒュンケルは、遠くから自分を引き留める声を聴いた気がした。
　それは、幼い少女の声をしていた。
　だが、ヒュンケルは、その声を振り払った。
　ヒュンケルは、低い声でつぶやいた。
「先生・・・あなたは、バルトスという男を知っていますか・・・？」
　ヒュンケルは、初めてアバンの前で、亡き父の名をあげた。
　それは、復讐ののろしだった。
　その名に、ヒュンケルは、アバンが息を飲む気配を感じた。
「知っていますよね・・・。あなたが命を奪った男の名だ。」
　「命を奪った」という表現は、適切ではなかったかもしれない。だが、ほかの言葉をヒュンケルは思いつかなかった。
　バルトスは、彼にとっては確かに生きてそこにあったのだ。
　ヒュンケルは、言葉をつづけた。
「魔王軍配下最強の騎士・・・。そして・・・。」
　ヒュンケルは叫んだ。それは、どこか泣いているように聞こえた。
「俺の父だった！」
　ヒュンケルは顔を上げた。殺意のこもった目で、アバンを見据えた。
「あなたが殺した！俺のたった一人の家族だった！！」
　血を吐くような、悲痛な声が、少年の喉から絞り出された。
「俺の剣に殺気が感じられたとすれば・・・それは・・・それは、父の仇である、あんたへの恨みだっ！！！」
　ヒュンケルは剣を抜いた。
「ま、待ちなさい！ヒュンケル！！」
　アバンは、とっさに剣をつかんだ。
　ヒュンケルの剣戟を、顔の目の前で受け止めた。
「話を聞いてください！！」
　間近に迫るヒュンケルの瞳に、アバンは訴えかけた。

「あなたには、まだ告げてないことがある！バルトスさんは、あなたに・・・。」
「その名を口にするな！！あんたが呼んでいい名じゃない！」
　ヒュンケルは、いったんアバンから離れたが、すぐにまた２撃目を打ち込んだ。
　アバンは、ヒュンケルの一撃を受け止めながら、顔をゆがめた。
　重い。
　アバンの腕に、衝撃が走る。
　いつか、ロカが言っていた。
　ヒュンケルは、意志が強い。それは相手を倒そうという意志なのだと。
　これまでの稽古で受けてきたヒュンケルの剣とはまるで違う、重い攻撃が何度も繰り出される。アバンは、それを、自らの剣で受け続けた。
　アバンは混乱していた。
　これはどういうことなのだ。
　なにが起こっているのだ。
　いつか、ヒュンケルにバルトスのことを語らなければならない日が来ることはわかっていた。
　バルトスの仇だと、ヒュンケルがアバンのことを思っていることも理解していた。
　最初にアバンから剣を習おうと決めたヒュンケルが想定していた敵は、アバンのはずだった。それも分かっていた。
　だが、ヒュンケルは、この２年間、地上の生活に少しずつ馴染んでいった。様々な人の思いに触れ、それを受け止めてきた。
　ヒュンケルは、人間らしく生きてほしいというバルトスの遺言に、自分でたどり着こうとしていたではなかったか。
　わずか半月前の、ヒュンケルの言葉と眼差しが、アバンの脳裏に蘇った。
—この風景の中に、俺もいて、いいんですか？
　そう言ってアバンを見上げた、幼く、心細そうなヒュンケルの眼差しがよみがえる。
　だが、今、目の前で、アバンに向かって剣を繰り出すヒュンケル

は、まったく異なる姿をしていた。
　燃えるような憎しみ。
　やり場のない悲しみ。
　時計の針が、急速に２年前に引き戻されたような、いやそれよりももっと増幅された強い感情がそこにはあった。
　ヒュンケルは叫んだ。
「父は・・・父は何も遺さず消えた！
　バケルだって同じだ！
　無残に殺された！」
　その無慈悲な言葉が、アバンを貫いた。
　ヒュンケルの悲痛な声が響く。
「何故だ・・・モンスターだからか！？
　そうやって、あんたたちは、その犠牲の上に胡坐をかいている。
　そんなものが・・・許せるはずがない！」
　ヒュンケルの攻撃を受け続ける中、防戦一方のアバンは、不意に、彼の剣に普段とは違う色を感じた。
　ヒュンケルの剣が、アバンの肩をかすめる。
　その剣の上に乗る色がある。
　剣の軌跡が、宙に描かれた。
　ヒュンケルの剣に、いつか、ネイル村の試合で見せた金の闘気が光る。
　だが、それとともに、それを覆い隠すように、黒い闘気が走った。
　アバンは、目を見張った。
　それは、人の身では持ちえない漆黒の、闇の闘気。
　かつて、魔王との戦いの中に見たもの。
—まさか・・・暗黒闘気！？何故っ！
　アバンは狼狽した。ヒュンケルの剣から暗黒闘気がほとばしる。それは、彼の身の内から発せられていた。
　そして、それとともに、アバンは見た。
　ヒュンケルの背後に、白い影が浮かび上がるのを。
　それは、白であるはずなのに、星の光も飲み込む漆黒の闇を感じさせた。

昼間であるにもかかわらず、太陽の光さえも感じなくなるような、圧倒的な闇。
アバンの周囲をも夜が覆い始めていた。
アバンの背を、嫌な汗が伝った。
—この深い闇・・・ハドラーをも上回る・・・。何故！？
その白い影から、ヒュンケルを守るように、暗黒闘気が広がってゆく。
その漆黒の闇がヒュンケルを包み込む。
それとともに、ヒュンケルの、その剣に乗る闇の色が濃くなっていった。
アバンは焦った。
このままでは、ヒュンケルが暗黒闘気に飲み込まれる。
背後の白い影が、何らかの影響をヒュンケルに与えていることは明らかだった。
ならば。
アバンは、後ろに飛び、ヒュンケルから間合いを取った。
剣を背後に回して構え、闘気を込める。アバンの剣に、金色に輝く光の闘気が集中した。
アバンは、白い影に向かって一撃を放った。
「空裂斬！」
アバンからまっすぐに、光の闘気が走る。
白い影に、光の闘気の軌跡が刻まれた。影は斜めにその剣戟を受け、切り裂かれた。
かのように見えた。
「どこを見ている！！」
いつの間にか、アバンの懐にヒュンケルが飛び込んできていた。
—しまった・・・！
ヒュンケルは、大きく右腕を引いた。
「これで終わりだ！！」
アバンの胸を狙い、強烈な突きの一撃が叩き込まれる。
アバンの視界に、ヒュンケルの剣の切っ先が迫った。
—やられる・・・！
次の瞬間。

アバンは、反射的に剣を振り上げた。
アバンの胸に、ヒュンケルの剣の切っ先が届くかに見えたその直前、アバンの剣が、ヒュンケルの剣をはじき上げた。
カウンターを受け、ヒュンケルは自分の技の威力をまともに返された。その衝撃で、彼の小さな体が宙を舞った。
―しまった・・・！
アバンは顔色を変えた。
手加減ができなかった。
反射的に防御したアバンは、ヒュンケルに、彼の技をそのまま打ち返し、カウンターで迎撃してしまったのだった。
ヒュンケルの体が、アバンの前で宙を舞い、そして、傍らの川の上まで飛んだ。
「ヒュンケル！！」
アバンは悲鳴を上げた。
ゆっくりと、その小さな体は、アバンの目の前で川の中へと落ちていった。
ざばん、と水音が響いた。
急流がヒュンケルの体を飲み込む。
轟音とともに、彼の体は瞬く間に川に飲み込まれ、流されていった。
アバンは、剣を捨て、すぐさま川に飛び込んだ。
既に初冬の刺すような水の冷たさが、彼に突き刺さる。
「ヒュンケル！」
アバンは、必死に下流に向かって泳ぎ、彼を追いかけた。
だが、その姿はどこにもなかった。
特徴的な銀の髪も、彼の握っていた卒業の証も、彼の体の影さえも、どこにもなかった。
アバンは、下流に向かって泳ぎ、時折、陸に上がって、その周辺を探した。
何度も川底まで潜り、川の中も調べた。
体が凍えるのも構わず、川の中とその周辺を探し続けた。
しかし、ヒュンケルの痕跡はどこにもなかった。
不自然なくらい、忽然と、彼の体も、その気配も、何もかもが消

えていた。
　何も見つけ出すことができなかった。
　まるで、初めから、存在していなかったかのように。
　アバンは、水を吸って重くなった髪と服のまま、陸に上がった。
　そして、両手を地面についたまま、彼らしくなく、困惑した表情を隠せなかった。
　アバンはうめいた。
「ヒュンケル・・・。」
　何故だ。
　どこで間違えたのだ。
　あの子は、亡き父の思いを汲もうとしていた。
　モンスターも人間もない。
　その両方の思いを受けて、あの子はこの地上で生きていこうとしていたのではなかったのか。
　その矢先だったのに。まだ何もかもこれからだったのに。
「ヒュンケル・・・。」
　アバンは少年の名を呼んだ。
　駄目だ。
　こんな形で終わっていいはずがない。
　こんな幕切れでは納得できない。
「ヒュンケルっ・・・！」
　アバンは血を吐くように叫んだ。
　だが、答える者は何もなかった。
　水滴だけが、ぽたぽたと、アバンの髪から落ち、大地を濡らした。
　それは、まるで、涙のようだった。

　リンガイアとの国境付近にある、ベンガーナの田舎町の宿屋の前に、ルーラの着地音が響いた。それと寸暇を空けず、宿屋に飛び込んできた男の影があった。
　宿屋の女将は、不意に訪れた珍客に驚きの声を上げた。
「あら、久しぶり。１年半ぶりくらいね。
　あのときは、人魂騒ぎを落ち着かせてくれてありがとう。」

だが、世間話もそこそこに、アバンは息を整える間も置かず、彼女に尋ねた。
「私と一緒にいた、銀髪の少年、覚えていますか？あの子は、ここには来ていませんか？」
　だが、アバンの問いかけに、女将は首を傾げた。
「え・・・？あの子？来てないわよ。どうしたの？」
「そうですか・・・。」
　アバンは、あからさまに落胆した顔色を見せた。
「大丈夫？疲れているんでしょう？顔色悪いわよ。お代はいいから、休んでいったら？」
　しかし、アバンはその申し出を断った。
「いえ、結構です。ありがとうございます。
　あの、もし、あの子のこと、何か見たり聞いたりしたら、教えていただけませんか？」
　アバンは、女将にそれだけを頼むと、すぐに宿屋を飛び出した。
「あ・・・ちょっと！」
　女将が慌てて後を追いかけたが、すでにアバンはルーラで飛び立った後だった。

　ラインリバー大陸穀倉地帯の村に降り立ったアバンは、かつて、ヒュンケルとともに１か月ほど世話になった家の戸を叩いた。
　以前と変わらない様子で、この家のおかみさんが家の中から顔を出し、アバンを見て驚いた声を上げた。
「ああ、お兄さん！」
　そして彼女は、そのままいつものようにアバンに話しかけた。
「お兄さん、この前はありがとうね。また収穫期にはよろしく頼むよ。」
　アバンは、彼女の言葉を遮るようにして尋ねた。
「あのっ、ヒュンケルは・・・あの子は来ていませんか！？」
　その言葉に、おかみさんは初めて、アバンが一人であることに気付いた。
「おや、お兄さん、一人なのかい？
　ああ、あの子？見てないけど・・・。うちの子にも聞いてみる

よ。」
　おかみさんは、家の中に入り、ヒュンケルと一緒に遊んでいた一番下の息子に声をかけた。
　だが、少年は、首を傾げて答えた。
「あの時から会ってないよ。」
「そうですか・・・。」
　アバンは、呆然とした様子で答えを返した。
　その様子に、おかみさんは、気の毒そうな顔をした。
「はぐれちゃったのかい？まだ小さいから心配だねえ・・・。見かけたら知らせるよ。」
　アバンは、その言葉に頭を下げた。

　アバンは、ホルキア大陸の遺跡の街に飛ぶと、彼らが宿泊していた宿屋の主人にヒュンケルの行方を尋ねた。
「ゴーストと一緒にいた、８歳くらいの銀髪の少年？そういやあ、街はずれのおばあちゃんが、そんな子に親切にしてもらったって言ってたなあ。」
「どこですか！その人は！！」
　アバンは宿屋の主人に食って掛かった。
　そうして、街はずれに住む老婆の家を教えてもらった。
　その家を訪ねると、老婆は穏やかな目でアバンに答えた。
「ええ、会いましたよ。優しい、いい子でしたね。
　ただ、私が会ったのは、もうひと月以上前のことです。そのあとは会っていません。
　あの子がどうかしましたか？」
　アバンは、黙ってかぶりを振った。この老婆に心配をかけられず、何も言うことができなかった。

　収穫祭が終わった後の街は、あの時の喧騒が嘘のように、穏やかな時間が流れていた。
　アバンは、あの祭りの日、花束を売っていた若い女性を訪ねた。
「ゴーストを連れた銀髪の男の子？ええ、覚えているわよ。印象的な子だったからね。」

彼女は、嬉しそうに少年のことを語った。
ただ、そこから紡がれた言葉には、アバンは落胆せざるを得なかった。
「でも、私も、あのときしか会ってないわ。いなくなっちゃったの？」
それだけ聞くと、アバンは、また、ルーラで飛び立った。

フローラは、側仕えの侍女から奇妙な報告を受けた。
「・・・幽霊？」
侍女はうなずいた。
「前騎士団長様のご自宅の跡地があったじゃないですか。２年前に、襲撃事件のあった。」
「ええ。でも今はあそこは何もないでしょう？」
「そうなんですよ。更地になってるんです。
その跡地に、夜中に、若い男が立っているのを何人もの人が見ているんですよ。皆さん、一様に、後ろ姿しか見なかったっておっしゃるんですが。
雪が降る中で、ぼおっと立っている後姿があったって。
そうしましたら、その若い男は、いつの間にか、ふっ・・・て消えていたらしいんです。
幽霊だったんじゃないかって話題になっていますよ。
フローラ様もお気を付けになってくださいね。」
フローラは、その話は眉唾だとは思った。何人も見ているのなら、逆に、幽霊ではないだろう。
姿が消えたのだって、ルーラで飛んだだけかもしれない。
街中では、衝突の危険があるので、高速移動をするルーラの使用は禁止されているが、夜中であればわからない。
だが、フローラは、侍女の話す内容に、言い知れぬ不安を感じていた。
フローラはアバンから渡された、胸元の輝石を握りしめた。
—アバン・・・。
どうか彼が無事であるように、祈った。

夜更け、ロカは、激しく玄関を叩く音に気付いた。
　非常事態を告げるかのような焦りを感じさせるその音に、ロカは慌てて玄関を開けた。
　すると、玄関を開けると同時に倒れこんできた人影があった。反射的に、ロカはその人物を受け止めた。
「・・・アバン！？」
　ロカは、抱き留めた人物が親友であることに気付くと、驚いて彼の名を呼んだ。
　アバンは、憔悴しきった声で、ロカに尋ねた。
「ロカ・・・ヒュンケルは、ヒュンケルは来ていませんか！？」
だが、ロカは訝しげに尋ね返した。
「ヒュンケル？どうしたんだ？来ていないぞ。何かあったのか？」
アバンは、呆然とした表情のまま、つぶやいた。
「いないんです・・・どこにも・・・。
　川沿いは残らず探しました。
　下流まで行って、海までたどり着きました。周辺の村や町は全部聞いて回りました。
　万が一のことも考えて、川底だって探しました。
いままで一緒に行った村や街も全部・・・。
　でも何も、手掛かりすらないんです・・・！」
「アバン、落ち着け、何があった。」
　だが、アバンは、ロカの言葉が耳に入っていないかのように、うわ言のように言葉を続けた。
「こんな、こんなことがあるはずない・・・こんなことでいいわけない・・・！
　私は、あの子にまだ何も告げてない。何も教えていないんです・・・！」
「アバンっ！！」
「お願いです。マァムには言わないでください。あの子には心配かけたくありません。」
「しっかりしろ、アバン！」
「ヒュンケル・・・私は・・・あの子に・・・！」
　そのまま、アバンは意識を失った。張り詰めていた神経の糸が、

ここで切れた。
　ロカは、アバンの体を抱きしめた。その身は冬の寒空に当たり、冷え切っていて、そして、最後に別れたときよりも、ずっと痩せて細くなっていた。

　月のような画面の下、玉座に座った王者の前に、死神は、報告のため、進み出た。
　現在のところは、この老人が、死神の主であったため、礼を尽くす必要がある。
　死神は、恭しく頭を下げた。
「例の少年は、無事にミストが回収したそうです。
　人間ですが、暗黒闘気の馴染みもよいとのこと。
　しばらくは、ミストが様子を見るようですよ。」
　その報告に、大魔王は満足げにうなずいた。
「それはよい。」
　すると、死神キルバーンは、困ったように報告を続けた。
「もっとも、ミストも今は万全じゃありません。思いっきり、勇者に斬られたみたいですよ。光の闘気で、ざっくりと。しばらくは治りそうにないですよ。」
　だが、大魔王は気にもかけていない様子であった。
「新たな戦力を手に入れたのだ。その程度の負傷はやむをえまい。」
　だが、キルバーンは、無礼な口調で、主であるはずの大魔王に異を唱えた。
「でもねえ、バーン様。僕は心配ですよ。」
「何がだ、死神。」
「だって、あの子は、勇者アバンを仇と言っていましたけど・・・本当は違うでしょう？大丈夫でしょうかね？」
　キルバーンの言葉に、大魔王は口の端に笑みを浮かべた。
　地底魔城が滅びた日、真実は、あの場で何があったのか、彼らは十分に分かっていた。
　地獄の騎士バルトスの死の真相が何であったのか。
　キルバーンは続けた。

「あの子は、あれだけの激情家だ。本当のことがわかったら、こっちに牙をむくんじゃないのかなってね。
　まあ、僕は不吉なことを予言するのが仕事ですけどね。」
　すると、大魔王はこともなげに言った。
「それならば、そうできなくすればよい。」
「と言いますと？」
　大魔王は、その肩書にふさわしい不敵な笑みを浮かべた。
「引き返せないところまで追いつめてしまえばよい。真実を知ったとして、いまさら地上にも人間社会にも戻れぬところまでな。」
　その言葉に、キルバーンは大げさに肩をすくめた。
「おおこわ。
　バーン様、そんなにあの子がお気に召しましたか？」
　キルバーンの問いかけに、大魔王はゆったりとした動作で、うなずいた。
「ミストバーンの与えた暗黒闘気で、幼いながら、あれだけの眼差しで勇者を追い詰めた。先が楽しみではないか。」
　そして、大魔王は、その面に、老獪ともいうべき笑みを浮かべた。
「それにだ、見てみたいとは思わんか、死神よ。」
「何をです？」
「勇者アバンの一番弟子が、この地上を滅ぼすところを、な。」
　大魔王の脳裏には、無人の廃墟に立つ、銀髪の戦士の姿が浮かんでいた。

　地底魔城。
　その最深部に位置する地獄門。
　かつて、ここで、アバンはとある騎士と戦った。
　敵ながら、敬うべき戦士の矜持を持った男。
　地獄の騎士バルトス。
　ここへは、３人で来るはずだったのだ。そして、お互いにこの地に残してきた想いと向き合おうと考えていた。
　だが、いまはもう、誰もいない。
　この戦場跡に、アバンは、たった一人で降り立った。

彼は、最後にバルトスが立っていたその場所で、膝をついて、頭を垂れた。
　アバンは、何か叫ぶように声を発したが、地下の回廊を吹き抜ける風の音に、その声はかき消され、言葉にならなかった。
　ただ、アバンの慟哭だけが、生きる者のない城に響いていた。